

こどもの動きを引き出すオノマトペ絵本

古 市 久 子

愛知東邦大学

こどもの動きを引き出すオノマトペ絵本

古市久子

目次

はじめに

1. オノマトペについて
2. オノマトペと身体表現に関する先行研究
3. 身体表現とオノマトペ
4. オノマトペ絵本
5. こどもの動きを引き出すオノマトペ絵本

おわりに

はじめに

身体表現では、絵本を題材にすることが多く、そのため筆者は、絵本を身体表現に活かすための論文を書いてきた。しかし、最も動きを引き出しやすいのはオノマトペ絵本である。絵本のストーリーやイメージを表現するときは、身体で表現されるまでゆっくり時間を要するが、オノマトペの表現は、聞いて見てすぐに身体が反応する違いがある。さらに、こどもはリズムの世代といっても過言ではない。したがって、リズムの要素をもっているオノマトペはこどもにとって快い響きとなり、身体表現を引き出す刺激となる。

従来の研究では、オノマトペの言語的な研究や心理学的な研究、オノマトペが動きの身体的効果を高める実践事例の分析などが行われてきた。しかし、オノマトペにおける絵本と動きのつながりについて書いたものはほとんどない。2007年には『日本語オノマトペ辞典』なるものも出版されている。

本論文では、こどもが日常目にする機会が多い絵本には、オノマトペがどのように描かれているのかを調査したいと考えた。初めにオノマトペの現在の研究的状況を見た上で、実際に絵本からヒントを得て、こどもの身体表現に発展させられる可能性はどのようなものかという視点から検討する。

1. オノマトペについて

オノマトペとは擬態語・擬声語・擬音語・擬情語の総称である。一般に擬態語（音をたてない事物の姿態を感覚的に写す言葉—うようよ・ゆったり）・擬声語（物の音響音声などをまねて作った語—ざあざあ・わんわん）・擬音語（音を模してつくられたもの—がーん・ごーん）・擬情語

(人の心の状態を表すことばどきどき・いらいら) などである。これらは「実際音ではなくても、それを模したり、状態を直感的に把握したりして、象徴化した言語である。したがって抽象名詞などに比べてイメージが豊かであり、しかも言語としての性質もちゃんともっている [石黒]」。

日本語と欧米語を比べると「オノマトペは、日本語の語彙体系を特徴づける特色の一つであるが、じっさい、日本語には枚挙に暇がないほど、オノマトペを使った表現が豊富である [皆島]」と言われる。それは欧米語が動詞、副詞などで表現されるからである。オノマトペは、もともと、動きを元にしたものであるから、日常生活では使用される頻度が多く、それは動詞・形容詞の代わりに動きや身体感覚を表現するからである。さらに、言語の発達が十分でないこどもの世界では感覚的に様子を伝えるオノマトペが特に多くなる。

運動行動を理解させるときにも、我々が日常的に行っている経験的に有効な方法の一つに擬態語的表現があるが、Werner & Kaplanはその距離の程度に応じて3つの活動に区別した [遠矢]。

①自然的一擬音的描出活動 ②相貌的描出活動 (擬態語の段階) ③慣用的表示活動とし、指示対象に音がない場合、それを可能にする心的機能が動きと言語の共感覚をもたらすとした。オノマトペは心的機能と言語を結びつけるツールである。そのツールは声を通して対外に表される。つまり、「事象の非音声的特徴を音声パターンに翻訳できるのはその両者の間に諸感覚の原初的統一に由来する、何らかの類似性があるからだ [石黒]」というのである。本論文では石黒のいう類似性で絵本と身体表現を結びつけようとするものである。

一方、こうした音象徴は動きにおいて効果があり、それは、多くの場面で用いられ、動きを引き出す刺激に使用されてきた事実がある。「オノマトペの問題は音と動きの一体化ではなく、心的震えから発した音が身体化されたものであると考えられる。一方、オノマトペは言語による社会化であり、それが他人の身体感覚を通して容易にかつ的確に社会化がなされるということである。つまり、オノマトペを通して他者の感覚を自己の身体の中に構成でき、幼児の身体表現におけるオノマトペの位置は非常に重要なものとなる [古市, 1995年, p. 26]」と考える研究者も多い。

オノマトペは繰り返しの言葉だけではなく、一つの言葉で言い切ってしまうものもある。藤田は「2・3歳児の言葉は単語や短いフレーズを一言で言い切るという特徴があり、話言葉すべてがリズムカルに聞こえるという傾向があった。子どもたちはその場の気分を短いことばで表現し、それを繰り返すことによって拍節的な時間単位を作りだす。同時に呼吸を整えるという音楽的表現のための基礎的なルールを毎日の生活の中で着実に学習し楽しんでいた。そしてリズムカルな言葉のほとんどが動作を伴っていたことは言葉の発声が進化を組織づける証明となる。3歳児では言葉をリズムカルに唱えることが圧倒的に多いということについて、子どもの気持ちから次のような特徴を明らかにした。自分の気持ちをだれかに強く訴えようとするとき、あるいは自分の気持ちを自分に言い聞かせるとき (叫ぶ、喚声をあげる、悲鳴をあげる、甘える、はやす、命令する等) などがそれである [藤田]」。

また、反対に、オノマトペは身体の動きを規制するという身体表現活動にとっては両手を挙げ

て絶賛できない部分もあるが、言葉と身体との相互作用を利用している面があることは確かである。

2. オノマトペと身体表現に関する先行研究

オノマトペ自身のもつ活力は幼児の身体活動に大きく影響することは、ダンスをはじめ身体表現に関わる指導者は経験的に感じている。また、研究者もオノマトペの使用が動きを活発にするというデータを得ている。こどもの身体表現を指導する時、筆者はオノマトペを多用することの功罪を研究する必要性を感じていた。それは使い方だけでこどもの動きを規定してしまうように感じられたからである。そこで、保育者が抵抗なく使用しているオノマトペを使った指導法を通してその有効性を見た。

その結果、身体表現においてオノマトペの持つリズム性は動きを容易に引き出すが、オノマトペの持つイメージに強い影響を受け、動きは単一になることを観察した。調査の方法は「洗濯機の回る」様子と、「ケーキの材料を混ぜて焼く」様子を2種類の言葉かけで行った。1つは普通の話し言葉、もう一つはオノマトペの言葉かけである。オノマトペのもつリズム性は動きを引き出す誘発剤にはなるが、動きそのものを限定するおそれのあること、ストーリーの中で使用する場合はそのストーリーに活力を与えるが、ストーリー性の乏しい題材においては、場面を切り取った、その場面とは関係のないオノマトペへの反応とも思える身体表現となるということが5才児10人の被験者において見られた〔古市, 1995年, p.28-33〕。

また、柴(1984)は舞踊や動きの教育において指導言語の重要性を指摘し、その言葉かけのひとつとして擬音語・擬態語を10語〈びゅーつ〉〈ごろごろ〉〈びかびか〉〈くるくる〉〈によるによる〉〈ぎゅっぎゅっ〉等を取りあげ、3・4・5才児がどのような動きで表現するかを見た。〈どしどし〉〈くるくる〉〈によるによる〉〈ごろごろ〉〈びかびか〉の5つは動きと直接的に結び付き、その特徴を特有な動きでとらえやすかったのに対して、〈びゅーつ〉〈しゅーん〉は走る、回るといった共通性は見られるものの、明確な特徴をもつ動きが認められにくい〔柴〕ことを示した。

オノマトペを使った言葉かけについて幼児を対象に行った小川等の研究がある。幼児がもつイメージについて指導者がよく使う「ピョンピョン」「クルクル」「コロコロ」「ブーンブーン」の4種のオノマトペを調べた。「イメージの種類においては、共有したイメージの中で友達と一緒に動くことで刺激しあい、新しいイメージを想起することにつながっていった。動きについては、友だちの動きを認め合ったり模倣することにより、幼児が自分の動きを見つける手掛かりとなった。さらに、皆で作る喜びを感じることで、動く楽しさがまし、次への意欲を引き出すきっかけとなった〔小川他〕」という。いずれもオノマトペがイメージを想起し、動きに発展することを見出している。

以上のように、オノマトペが身体表現の指導の際によく使用されることを前提にして、その使われ方を調査したものが多い。

3. 身体表現とオノマトペ

筆者が行った身体表現の授業で、動きのイメージをオノマトペで表現する調査を行った。その中で最も多くのオノマトペが得られた言葉は「まわる」である。「まわる」という言葉からイメージする擬態語・擬音語を例にあげて、身体とオノマトペのつながりを見る。「まわる」では81種類の言葉が抽出された。それをまとめたものが表1である。20人からの抽出であるが、一人で複数の言葉を書いた者がいるので、延べ177個の言葉になった。具体的に書かれたものを図表1に示す。

図表1 「まわる」からイメージする擬態語・擬音語 [古市, 1998年, p. 74より作成]

順位	擬態語・擬音語	1つの言葉に対して答えた人数
1	ぐるぐる・くるくる	15
3	ころころ	13
4	ごろごろ	12
5	くるりん	6
6	くるんくるん	5
7	ころん・びゅんびゅん・ごろんごろん	4
10	くるん・ぐるんぐるん・ころんころん・ごろん・ひゆるひゆる	3
15	ういーん・がらがら・きゅつきゅっ・きよろきよろ・くりんくりん・ぐるり・ぐるん・ころころころ・ごろごろ・ごろごろごろ・ごろりん・ころりんころりん・ことんことん・ぱたんぱたん・ひゅーひゅー・ふらふら・ぶるんぶるん	2
32	うわーん・かちっかちっかちっ・がっがっがっ・からから・がりがり・からんからん・からんころんからん・きゆるきゆる・きゆるるきゆるる・きりっ・くりくり・くりっ・くりん・くるっ・くるるるー・くるるん・ぐわんぐわん・ごー・ころろん・ごろんごろんごろん・するるるるー・しゅー・しゅーしゅー・しゆるしゆる・しゆるるー・しゆるるしゆるる・しゆるるるる・ちっちっちっ・どってんぱったん・ぱたぱた・ぱたんぱたん・ひらりんひらりん・ひゆるるー・ひゆるりん・ひゆるるるるー・ひゆるるるるん・びゆるるんびゆるる・ひゅーりらひゅー・ひゆるるー・ひゅーんひゅーん・びゅーんびゅーん・ぶらんぶらん・ぶるんぶるん・ぶんぶん・べらるらー・ぼてんばてん・ぼてんぼてん・ぼろぼろ・まきまきー・るるるるー	1
81種類	177個	

1995年11月 調査対象 大学生20人

「まわる」からイメージするオノマトペで最も多かったものから7つ—ぐるぐる・くるくる・ころころ・ごろごろ・くるりん・ころん・びゅんびゅん—と、最も少なかったものの中から7つ—からんからん・きゆるきゆる・ぐわんぐわん・しゆるしゆる・ひゆるるん・まきまきー・るるるる—を選び、それらの言葉からイメージできる動きを調査した。結果は図表2に示す通りである。それらの数を調べると、多いグループで、一つのオノマトペからイメージできる動きは

平均10.7個であり、少なかったオノマトペからイメージできる動きは7.4個である。これらの数字から見る限り、一般的には使わない、個人的な感覚ともいえるものであっても、オノマトペとして刺激を与えられると、動きをイメージすることができる事がわかる。

図表2 「まわる」擬態語・擬音語からイメージできる動き [古市, 1998年, p.75]

		擬態語・擬音語	擬態語・擬音語からイメージできる動き
「まわる」イメージで回答の多かった擬態語・擬音語から(総数75)(平均10.7)	1	ぐるぐる	洗濯機が回る・扇風機が回る・ヘリコプター・コーヒーカップ・一人で回転・両手を広げて回る・首を回す・膝を曲げて回る・腕を回す・風車
	2	くるくる	目が回る・曲芸で振り回す・扇風機が回る・カールした髪の毛がね・風車・オルゴールの人形が回る・バレリーナ・アイススケート・新体操のリボンが回る・こまが回る・風見鶏
	3	ころころ	何人かで手をつないで回る・細かく回る・首を回す・目が回る・りんごが転がる・子犬が走る・小さい石が坂道を転がる・みかんが転がる・猫・ボウリング・前転・鹿の糞・小さいボールが床に転がる・おむすび
	4	ごろごろ	大玉転がし・起き上がりこぼし・小太り・お父さん・雷か鳴る・ごろ寝・横になって回る・力を抜いて床に転がる・こたつで転がる・大きな石(岩)が転がる
	5	くるりん	でんぐり返し・新体操の選手・猫が高い所から落ちる・前転・一回転・鉄棒で前回りをする・逆上がり・振り返る・ゆりかご
	6	ころん	消しゴム・うさぎの糞・おすもうさんが立とうとして立てない・おむすびか落ちる・だるまが転ぶ・お箸が落ちた・落としたコイン・小さくなって床に転がる・肉だんご・寝返り
	7	びゅんびゅん	北風が吹く・速いスピードの車が通り過ぎる・自転車でとばす・父が子どもの手を持って振り回す・人が回る・鉄棒で回る・縄をもって回す・回りながらとぶ・ぶんぶんごまを回す・ハンマー投げを投げる直前
「まわる」イメージで回答の少なかった擬態語・擬音語から(総数52)(平均7.4)	1	からんからん	空き缶・すずが転がる・下駄で歩く・鐘の音・でんでん太鼓・水車の音・金物が転がる
	2	きゆるきゆる	鋭いものが何かに突き刺さりながら回っている・風車・身体を縮めて小さく回る・CDが回る・足元で細かく回る・回しながら蓋を開める・具合のよくない蛇口を回す・タイヤ・カセットテープ・お腹の音
	3	ぐわんぐわん	思い切り振り回している・順を回す・上半身だけ回す・洗濯機・空気の抜けたボールが弾む音・大きな機械のモーター・ダンスで回転し過ぎたときの頭の中・頭の痛い音
	4	しゆるしゆる	回りながら消えていく・素早く回る・蛇がとぐろを巻く・ねずみ花火・煙・圧力鍋の吹き出し口・蛇の舌・さらさらのリボンがほどける音
	5	ひゆるるん	こがらし・風に木の葉が舞う・回るとぶ・回りながら移動
	6	まきまきー	渦巻いている・糸巻き・胸の前で手を回す・髪の毛のカール・腕を8の字に回して舞い上がる・蛇・人が回る様子・糸まきまきの手遊び
	7	るるるるー	さるが楽しそうに回っている・女の子が踊っている・鼻歌・2人で手をつないでスキップしながら回る・歌いながら回る・糸玉を作るときの音・風が吹いている

1995年11月 調査対象：大学生20人

参考に、同時期に調査した他の動きから連想できるオノマトペについても、連想された数を図表3に示す。「まわる」が特別多いのは、人の動きが多いこと、「まわる」ものは回るものの大きさによって、オノマトペが違うことによるものであろう。「とぶ」が他のものに比して少ないのは、空間で跳ぶという限定された動きだけで、それ以上は不可能であることの証明であろう。これらの動きはオノマトペを連想させるが、逆に、オノマトペが動きを引き出すことも真実なのである。そこで、絵本を身体表現に活用できるための参考資料とした。

図表3 動きから連想できるオノマトペの数

	動き	個数
1	まわる	81
2	たたく	31
3	のびる	24
4	おす・ひく	23
5	ゆれる	21
6	とぶ	8

4. オノマトペ絵本

調査場所：愛知東邦大学附属図書館・近江八幡市図書館

調査日：2013年4月～2014年8月

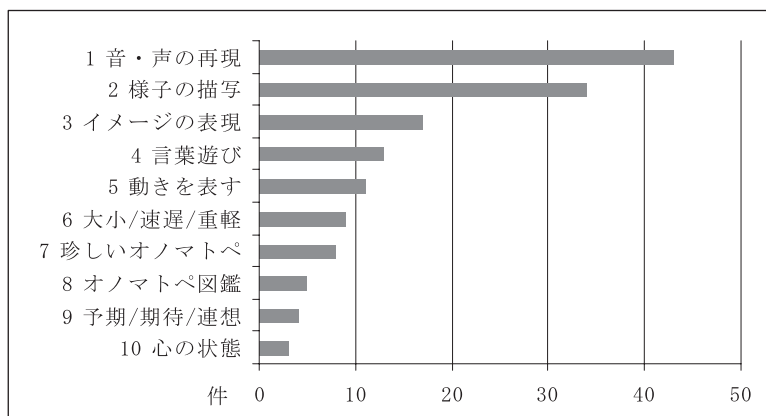
対象の絵本：両図書館の絵本を読み、オノマトペ絵本83冊を選んだ。

手続き：絵本の中のオノマトペをカテゴリ別に分類した。カテゴリを決定するための読み取りを3回行い、10個のカテゴリを設定した。それらは図表4に示している。さらに、そのカテゴリで、83冊の絵本を読み取った。読み取りは3回行い、最後のデータを結果とした。

読み取りの客観性については、古市他の「アンケート調査のデータ読み取り作業における信頼度と問題点についての研究 [古市他 1995年]」により、筆者の複数回の読み取りとした。

結果：抽出されたカテゴリは、数の多い順からみると、1 音・声の再現、2 様子の描写、3 イメージの表現、4 言葉遊び、5 動きを表す、6 大小／速遅／重軽、7 珍しいオノマトペ、8 オノマトペ図鑑、9 予期／期待／連想、10 心の状態 である。カテゴリの分類は、『日本語オノマトペ辞典』を中心に置きながら、絵本特有のものも加えて筆者が作成した。

分析の結果



図表4 絵本にみられるオノマトペの使われ方

図表5 10個のカテゴリをふくむ絵本の例

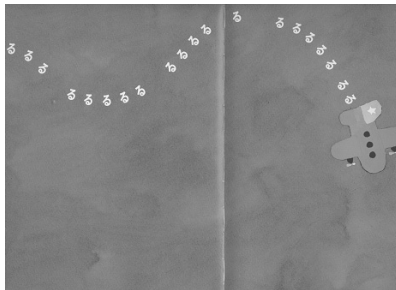
1 音・声の再現	「るるるる」「ばたばたもんちゃん」「でんしゃはうたう」「り・り・り・り・り」「すっ・すっ・はっは・こ・きゅ・う」「リズム」「おならのしゃもじ」「ちいさいきかんしゃレッド号」「ドオン」「みずちゃぼん」
2 様子の描写	「てくとこずんずん」「もこもこ」「ころころころ」「どんどこどん」「みみずのオッサン」
3 イメージの表現	「にゆるべろりん」「ぶきやぶきやぶー」「このラップはだれのかな」「ぐるんぐるん」
4 言葉遊び	「とんとんどんどん」「どんどんとんとんチャチャチャ」「オーストップ」「しりとリズム」
5 動きを表す	「できるかな!」「ぐるぐるどぼーん」「こちょこちょもんちゃん」「おつむてんてん」「おどります」
6 大小/速遅/重軽	「ごろりんごろんころころ」「やぎのブッキラボー3きょうだい」「チキチキチキチキいそいでいそいで」「ぴちゃん・ばしやん・ざぶん」「ヒュンヒュン・ビュンビュン・ビュワンビュワン」
7 珍しいオノマトペ	「カニツンツン」「んぐまーま」「ぼばーぺぼびぽっぷ」「もけらもけら」「モケモケ」
8 オノマトペ図鑑	「オノマトペ図鑑」「ぼーるころろぼーん」「ばしん・ばん・どかん!」「シイイッ!」
9 予期/期待/連想	「ごろごろごろん」「ごろりんごろんころろろろ」「とんとんとん」「ぶぶんぶんぶんしんぶんし」
10 心の状態	「のびのびのびーん」「ぴたっ!」「ぬぬぬぬぬ」「きかんしゃやえもん」

分析の結果、図表4のような数値を得ることができた。10個のカテゴリとそれにカウントされた代表的な絵本の名前を示したものが図表5である。

1 音・声の再現

これは、人間の声以外から出た言葉を表したもので、『日本語オノマトペ辞典』の第一の基準と同じものである。人間から発声したものはオノマトペ辞典では第二の基準としているが、ここでは第一のカテゴリに含めた。わかりやすく言うと、音や声の表現である。ここでは動物の鳴き声、楽器や演奏の音、自然の音、ものが出す音、人の声、乗り物の走る音、かけ声、などがこれに入る。

最も多いのが、「音・声の再現」で全体の29%である。音・音楽・声は音そのものを表したものでそれを表現した絵本も多く [古市, 2010年b]、数が多いことは納得がいく。今回、調査の対象としなかったものの中にも、絵本の随所に音・声のオノマトペが見られるものも多い。こどもにとっては理解しやすく、おとなとも意味を共有できるものである。『るるるるる』の「るるるるる……」、『ひそひそそそそ』の「ひそひそそそそ」、『ピチクルピチクル』の「ピチクル」、『そりあそび』の「きゃあ」などがこれである。『みずちゃぼん』では水の音を「びちゃ」「ぼとぼたぼしゃ」「ごー」「たぶんたぶん」など状況によってオノマトペがいろいろ変わることを書いている。



『るるるるる』



『こぶたちゃんのそりあそび』

2 様子の描写

次に多いのは「様子の描写」で、全体の23%である。『日本語オノマトペ辞典』の第三の基準にあげられているものと同じで、音のないもの、または、聞こえないものに対して、その状況をそのものが持つ感覚で表現した言葉である。これについては、他のカテゴリと重なりあう場合があったが、絵本のストーリーからどちらかにするのか、両方にカウントするのかを判断した。

本論文では、こわがっている様子、急いでいる様子、歩いている様子、ものが動く様子、話している様子、ものが変化していく様子、循環の様子、伸びていく様子を含めた。



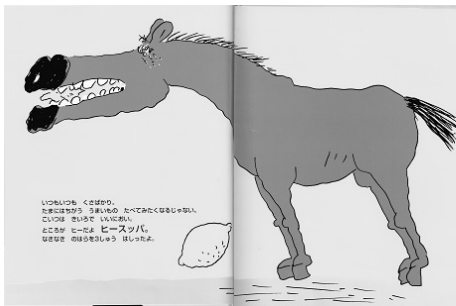
『によきによきのき』



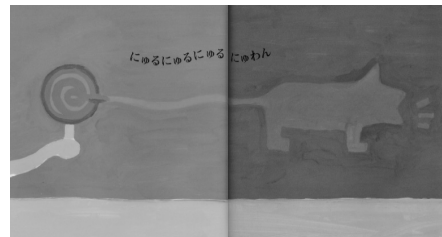
『みみずのオッサン』

3 イメージの表現

「様子の描写」よりも、もっと感覚的で形のないものを目に見えるあるいは音に聞こえるように表現したものである。ここからはぐっと少なくなって、全体の12%になる。これは絵本作家のユーモアや感性で、こどもの心を惹きつける。動物の鳴き声を組み込んだもの『オースッパ』の「ヒースッパ」はすっぱいレモンを食べたときに、馬は本当にこう鳴くだろうと思わせる。動きに動物のイメージを入れた『にゆるぺろりん』では「にゆる」という言葉と犬のイメージが一体化して、「にゆるにゆるにゆるにゅわん」という言葉になる。電車の走る音を動物のイメージで表現した『むしむしでんしゃ』はいも虫の電車が「ののたんののたん」と走る。循環する自然の連鎖のイメージを描いた『ぐるんぐるん』の「ぐるん」がある。形のイメージでは、『もけらもけら』の三角の絵のところで「ピタゴラ」など、興味を引く言葉が並ぶ。



『オースッパ』

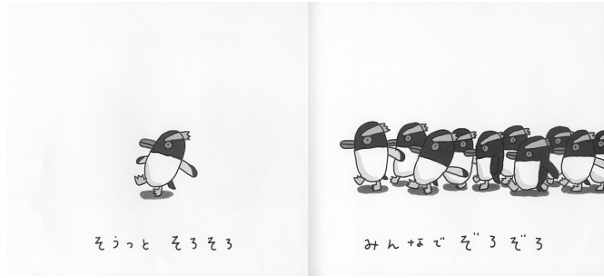


『にゆるぺろりん』

4 言葉遊び

オノマトペにストーリーの意味を持たせるよりも言葉のリズムや楽しさを味わう絵本がこれに含まれる。全体の9%である。こどもたちのオノマトペに対する関心は大きい。言葉遊びは読み聞かせの途中から、すぐに、こどもがことばを出してることがある。聞いているだけでなく、全身で言葉を体験しているのであろう。

今回は『とんとんどん』の「とんとん」と「どんどん」、「ぶんぶん」と「ぶんぶん」、「きらきら」と「ぎらぎら」、「そろそろ」と「ぞろぞろ」のように対比させたもの、『どんどんどん どんチャチャチャ』の「かまぼこぼんぼこぼんぼこぼこぼこ」のように、言葉の調子でどんどんつけ加えたもの、調子よくはやしたてる『おならのしゃもじ』の「ぶっぶくぶーとっぴりびん おいもとごぼうがどんどこどん ちんからほいほいぶっぶくぶー」というおならの音などがある。また、『しりとリズム』の「ポウふらふらふらフラダンス」のように名前をオノマトペに発展させたものもある。



『とんとんどんどん』

5 動きを表す

「動きを表す」は全体の8%である。歩く様子の表現は「てくとこずんずん」「どんどこ」「どんどんどんどん」「たったかたったか」「とつとことつとこ」「のっしのっし」と主人公に合わせて数多く描かれている。運動する表現は「くるくるくるりん」「おつむてんてん」「ばたばた」「ぶらーんぶらーん」「どっしんどっしん」「こちょこちょ」などである。ダンスの動きを表現した『ダンスダンス』の「タッタッタ」、『おどります』の「メグメグフラフラ」などのように特別な動きを表わしたものもある。



『こちょこちょももんちゃん』



『できるかな?あたまからつまさきまで』



『チキチキチキチキいそいでいそいで』

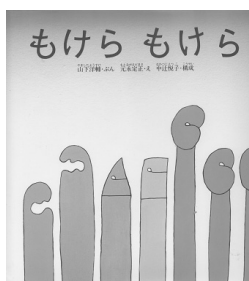
6 大小/速遅/重軽

「大小/速遅/重軽」は全体の6%に当たる。今回は『やぎのブッキラボー3きょうだい』『ヒュンヒュンビュンビュンビュワンビュワン』のように主人公の身体の大きさによって違うもの、『チキチキチキチキいそいでいそいで』の「コッチリポッチリ」という速い時計と「チキチキチキチキ」という遅い時計によって行動が変わってくるものや、『ぴちゃん・ぼしゃん・ざぶん』の「ぴちゃん」「ぼしゃん」「ばしゃん」「どぼーん」というように、動物が水たまりに入るとき聞こえる水の音の違いで大きさが表現される。

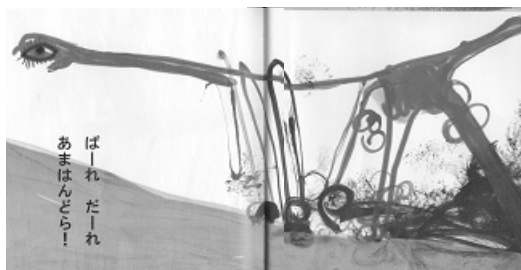
7 珍しいオノマトペ、

「珍しいオノマトペ」は全体の5%である。普段聞き慣れなかったり、突然口をついて出てく

るものや、何かから着想して生まれるものなどがあるが、絵を見つつ楽しむという絵本ならではのオノマトペである。『カニツンツン』『んぐまーま』『ぼーぺーぼびぱっぷ』『もけらもけら』『モケモケ』などがこれに含まれる。



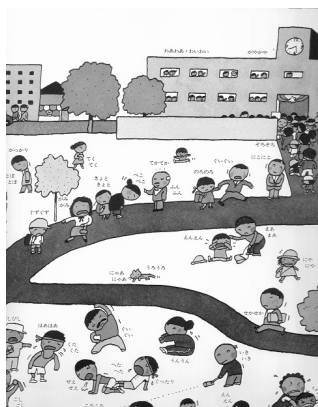
『もけらもけら』



『んぐまーま』

8 オノマトペ図鑑

「オノマトペ図鑑」は全体の3%であるが、特徴的なのでどれも印象に残る。もの名前や様子、心の様子、音や声など、多くの絵が描かれており、絵の横にオノマトペが並んでいて、辞書のこども版のようになっている。また、ストーリーめいたものを展開しつつも、多くのオノマトペを紹介するものもある。ボールが飛んで行ったところで出会うもののオノマトペが並んでいる『ぼーころころぼーん』のように、必ずしも絵本のタイトルには図鑑という言葉がついているとは限らない。



『言葉図鑑 よやすのことば』



『ぼーころころぼーん』

9 予期／期待／連想

「予期／期待／連想」は全体の3%と少ないが、オノマトペが非常に効果的に使われ、絵本に活力を与えている。『日本語オノマトペ辞典』ではこのような基準は設けていないが、絵本としては必要であると考えてここに一つのカテゴリとして読み取った。オノマトペが次の動きを予想する、期待を呼び起こす、あるオノマトペがでてくると次のページにいくというものもある。

『ぶぶんぶんぶんしんぶんし』では「かとおもえばぶぶんのぶん」という言葉で次の場面に移行する。『ころころごろん』の「ころころごろんといたら」のつぎに何が登場する。これらは本を読み進める楽しみを倍加させる。身体表現では場面展開の言葉かけに応用できる。



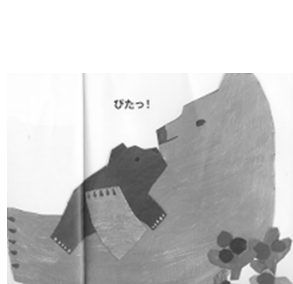
『ぶぶんぶんぶんしんぶんし』



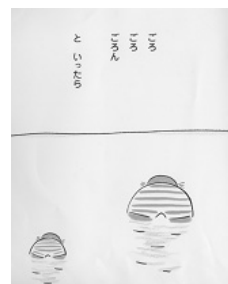
『のびのびのーん』

10 心の状態

「心の状態」は2%で、登場人物の気持ちを表現する。このカテゴリは「様子の描写」に含まれるものもあるが、絵本を見ることもたちの方からは主人公の心の状況に共鳴する大事なものとしてここに設定した。親子の関係を表す、『びたっ!』の「びたっ」、『きかんしゃやえもん』の怒っている様子の「ぷっすんぷっすん」、ゆったりとした状況は『のびのびのびーん』の絵や字で表現される。



『びたっ!』

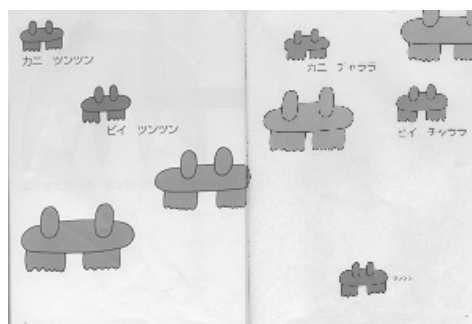


『ころころごろん』

5. 動きを引き出すオノマトペ絵本

〈楽しさが動きを引き出す〉

これはどの絵本にも当てはまる。オノマトペはまず、声にした時の楽しさにある。したがって、読み聞かせにはぴったりである。リズムカルな調子の言葉を子どもはすぐに覚え使う。そのことによって、言葉を記憶すると同時に仲間と意味を共有し、仲間同士の確認ができる。そのことが楽しいのである。やがて、遊びの中で頻繁に使われ次の遊びに発展していく。絵本で知ったオノマトペが身体表現と出会うプロセスでもある。どの絵本もこれに入るが、特に、カテゴリ1・4・7・9では遊びをどんどん発展させられる。



『カニツンツン』

子どもが大好きな絵本である『カニツンツン』には以下のような添え書きがある。
「生きているから子どもは笑う 生きてるだけで子どもは喜ぶ 子どもに教える絵本じゃありません 子どもに教わる絵本です。わけがわからないが、声を出してみると、おもしろい。何かわ

かりそうでわからないが、そのうちそんなことどうでもよくなってくる」という谷川俊太郎氏の言葉である。日常こどもはこんなことを喜ぶんだと感ずることが時々あるが、『カニツンツン』の絵本に対する反応はまさしくこれである。

「通常の言葉では言い尽くせないことを、ずばりと言うことができるところに、オノマトペの強い表現力と尽きぬ魅力がある。けれどもこの表現力と魅力は両刃の刃でもある〔小野, pp. 3-4〕と、小野は『オノマトペ辞典』で、生き生きとした状況は伝わるが、あまりに感覚的すぎることを言葉として使用することを心配している。しかし、こどもの場合は感覚的であるからこそ、直観的に受け入れられ、表現ツールとして大きな価値を持つ。短い言葉でありながら、文章としての価値もあり、文章よりも強烈に心に残る。やがて動きのリズムと合致して、身体表現に形を変えていく。

オノマトペはすぐにこどもの世界の流行語となる。2歳児向けのふれあい遊びを行った時に、絵本の途中で気に入った言葉を、繰り返して言った。それを聞いた周囲のこどもがまた繰り返しかえし、言葉はどんどん広がったことがある。オノマトペは集団において伝染する力もある。笑う楽しさは間違いなく身体を動かすことにつながる。ここで抽出したような珍しいオノマトペは規定されたものではなく、新種で多様な動きを生み出すことが予想される。なぜなら、今まで聞いたことがないものであるので、自分流の表現になるからである。

〈相似形のオノマトペは身体表現を確実にする〉

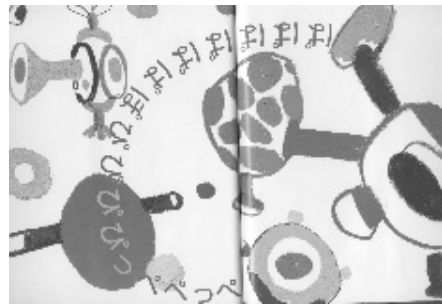
カテゴリ6はこの代表的なものである。『やぎのブッキラボー3きょうだい』では大中小の大きさが違うやぎが登場する。「このやぎたちが「橋を渡る」という3回のくりかえしだけで物語が成り立っているといってもいいほどです〔西郷他a〕」と西郷他は「《反復》と《対比》で刻む人間像」という項でその登場人物の性格をみている。ここで、大きな役割を果たしているのが「キイ、ギイ、キイ、ギイ」「キーイ、ギーイ、キーイ、ギーイ」「キキーイ、ギギーイ、キキーイ、ギギーイ」とオノマトペで示された大中小のやぎが橋を渡る音の表現である。オノマトペには言葉の多くを使わずして、背景を映し出す力がある。これは、こどもたちが表現するためには大きな表現原動力となる。さらに、強調についても述べている。「ここに三べんの《反復》があります。同じことがくりかえされるわけですが、小さいやぎから中くらいのやぎ、大きいやぎというふうに、《変化をともなって発展》していきます。そのイメージが端的に描かれたものとして、オノマトペが考えられる〔西郷b〕」のである。オノマトペは変化するものを明確にして大変わかりやすくしている。そのことが、身体表現を容易にし、表現したい気持ちを高めるのである。ちなみに、大小の表現は2歳児ですでに、上手に行うことができる。「大きな栗の木の下で」の手遊びを使った実験で古市は「小さい栗の木を指先でかわいく表現する。大きな栗の木の下は足を開いて両手を思い切り広げる〔古市, 2004年〕」という風に大小を表現できたことを報告している。

『ヒュンヒュンビュンビュンビュワンビュワン』ではヒュンヒュン(小)→ビュンビュン(中)→

ビュワンビュワン(大)も女の子の大きさにつれてだんだん大きくなっていく。『ぴちゃん・ぼしちゃん・ざぶん』ではかえるがぴちゃん→かめがぼちゃん→ワニがぼしちゃん→かばがどぼーんと水たまりの跳ねる音が変わっていく。こどもの口をついて出るオノマトペが身体を動かす大きさにつながり、表現を引き出すことのみならず、見ている者もすぐ理解できる、いわゆる上手な表現になる。『ちいさななかよしさん』ではダンスをする時の足のトントンという音が字の大きさで示されているようなものもある。これは絵から刺激を受けて動きを発展させることができる。『ごろりんごろんころろろ』では重い荷物を後ろから押してくれる動物が増えるたびにごろりんごろんごろん→ごろんごろん→ころころころ、と音が変わっていった、引っ張る力が少しで済むようになったことがわかる。このように、オノマトペが少し変化するだけで、状況の変化がくみ取れる。書かれた言葉に加えて、絵や字の大きさ、読み手の声の大小によってさらに強調される。

〈言葉と意味を瞬間的に理解し、表現を容易にする〉

どのカテゴリもこれに当てはまる。オノマトペが子どもたちに喜ばれ使用されることで、言葉が記憶され、その言葉にまつわる状況も同時に記憶されていく。それは確固たる彼らの知識として蓄積されていく。日本においては、古くから使用され「生き生きとした口語を文字に写すようになった中世、近世以降のオノマトペは、かなりの数にのぼる。このオノマトペの中には、現在でも耳慣れないものも多く、



「ぼばーぺぼびぼっぷ」

また、現在と微妙に違った形のもの、同じ形でもまったく違った意味で用いられているものもある [小野, p. 4] という。「カニツンツン」「んぐまーま」「ぼばーぺぼびぼっぷ」「モケモケ」「もけらもけら」などは現代であるからこそ表現され、受け入れられているオノマトペであろう。グローバル化した社会では、色々な国の言葉を受け入れる社会的姿勢が身体に受け入れられるような状況になっていることも考えられる。だとすれば、従来のオノマトペにこだわらず、もっと自由に作り出してもいいかもしれない。『ぼばーぺぼびぼっぷ』では、「ばばびびび」とか、「ぼばー？」とかいう擬音がいろいろ向きを変えてページに踊る [18] が、宇宙人のようなものが「ばびぶべぼ」語をしゃべっているかのようである。「ばばペ ばぶぼび ぼばぶぼび ばべ ぶべ? びびびー びびーぶ ぶーペ びぶペペペ ぼばばぼびびべば べびべびペペ！」など、電子音をオノマトペで現したような言葉で、子どもたちは絵本にくぎ付けになる。

〈イメージができると身体表現につながる〉

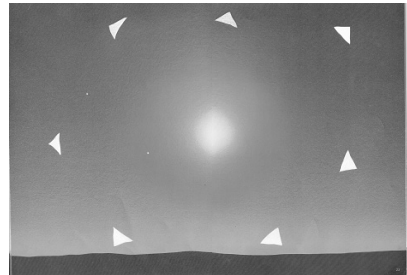
カテゴリ 1・2・3・6・10 が特に関係が深い。電車の音を使った絵本ではその音だけで次々とイメージが広がる。やすいすえこ作・福田岩緒絵の『がたたんたん』は「ほとんど文章がなく、全部、がたたん、がたたん、という文字だけ。ずっと、がたたん、がたたん。だから、これ

を読むときは、電車の振動をBGMのようにして頭に浮かべながら読むんだなと思いました。途中で、キキキキというブレーキの音がしますが、最後まで、がたん、がたんがたん、と無言で終わっていくという話です [椎名] とBGMとして身体と対話しているオノマトペの存在を示している。『むしむしでんしゃ』の走る音はいもむしでんしゃが「ののたんののたん」といかにもいもむしらしく走る様子がイメージされる。身体表現はイメージができると、表現するのは容易になるので、イメージを広げるオノマトペは身体表現に良い刺激となる。

〈動きを引き出す〉

オノマトペは全体を含めて動きを引き出すオノマトペであるが、とくに、カテゴリ 5 は典型的なものである。

言葉は発達的にみて、身体の発達と深い関係にある。正高は『子どもはことばをからだで覚える』の「声の分化と手の文化」の項で「健常の赤ちゃんが個々の音パターンを調音する技能を獲得するため、最初は身体運動の「介在」が必要であるという事実はそれらの多様な種類の音の産出がそもそも、特定の身体運動によって喚起される感覚の介在抜きには幼い子どもにとって不可能であることを示唆しているのだろう [正高] と解説している。成長するにしたがって身体運動は言葉や文章へ移行するが、この言語獲得の手段が、感覚として残っているであろうし、それは成長するにつれて、体験的・身体的な知識としてどんどん蓄積されていく。



『もこもこもこ』

『もこもこもこ』を2歳児に読み聞かせたところが、「もこもこ」と言いながら一人の子が両手を頭にあげてしゃがみこみ、だんだん立ち上がりながら盛り上がっていく様子を身体で表現した。すると、他のこども達も次々と「もこもこ」の表現を始めた。保育者が指導をしなかったにも関わらず、自然と行ったのである。他のこどもたちもすぐにそれを見習うという幼児期の特性から、その率などを特定したりすることは無理であるが、「ぱちん」と風船が割れる頁では絵本の前までやってきて、絵本の頁をぱちんと手でたたいたのを観察している。古市は「身体表現の第一歩は、動き始めることであるが、ここを乗り越れないために身体表現に入っていけないこどもがいる。また、最初に戸惑いを見せるこどもが少なからずいる。この地点を“身体表現の壁”と呼ぶことにする。身体表現は最初の手足を動かす動作ができるかできないかが、分かれ目になる。動きに容易に導くことで、さらに、自分で想像してイメージを発展させていくことへの動機付けになる。このプロセスを“身体表現への道”と名づけ [古市, 2006] た。この「表現の壁」は、風船がパチンと割れる頁に崩れて、その後、再び絵本を読み聞かせると、最初の頁から身体を動かしていくことを観察している。

三宅他 (2004) の『絵本ガイドブック』 [三宅他] ではいのちのリズムという項目で、『もこもこもこ』を聞く小学校のこどもたちの様子について「この絵本には聞き手を触発する力があり、

この力は大勢で読めば読むほど大きななるように感じる。この絵本の力を受けた子どもたちの様子は、幼い子がびよんびよんと跳ねながら歩いたり、話をしたりする姿にどこか似ている。生命を感じる一冊」と解説している。また、中学校でも「なんかもこもこでできた」「あっ、割れてもた！」と声をあげたりくすぐったそうに笑ったりしはじめ、皆の心が生き生きとこの一冊の絵本から伝わってきた。幼い子どもたちと読み合うときと同じくらい、もしかするとそれ以上に、この絵本のもつおもしろさを一緒に楽しむことができた。「すごい絵本や。これ一冊あれば子どもは十分やなあ」という女の子までいた」という。

『できるかな？あたまからつまさきまで』は動物が「きみはできるかな？」と動く部位を示しながら誘ってくれる本であるが、中川は「身体を動かす楽しみを知っているのはなんととっても子どもたちです。でも、最近その楽しみが少しづつ子どもの世界から消えているような気がします。でも、この絵本のように、動物のまねっこ遊びから始めるなら動物になりきった子どもたちは、心が解放されて夢中になって体を動かすことなのでしょう」という。実際その通りなのである。「また、動物たちの動きを表現した言葉「ゆらゆらゆらゆら」「ばんばんばんばん」「どんどんどん」「ぐうんぐうん」などもリズムがあり、動物になったつもりの楽しさが倍加しています。[中川]と動きと擬態語・擬音語のつながりを説明してる。

『もけらもけら』について安藤他は「この本はジャズである。「ころ めか もの」「しゃばたさ」「もけけ け け け」などは稀代のピアニスト山下洋輔の立派な「ジャズ語」なのだ。加えて元永定正の絵も、目でとらえたあと耳に抜けるような摩訶不思議な味わいを出しており、読み終わるとふたりのジャズセッションを観た感覚が残る。「びたごら！びたごら！」の語感が気に入った息子はいつも何度でもそのページを僕に読ませる。なんて破壊力のある絵本。読むべし！聴くべし！[安藤]と感想を寄せている。こどもが何度でも読ませるのは気に入ったからである。心の中で踊る言葉は心の中だけにはとどまらず、やがて身体の外にあふれ出てくる。それは個性のある表現となって表れてくる。

〈こどもはオノマトペをどのように理解しているか〉

ここでオノマトペをこどもはどのように感じているかについて、触れておきたい。渡辺他は「オノマトペ語に対する幼児のイメージ」について次のように述べている。「オノマトペで、加齢とともに連想される語の数が増えること、オノマトペごとに連想の難易度が異なる。……幼児においてもオノマトペを多義的に理解していることが示された。また、「ニョロニョロ」と言えば“へび”、「ピョンピョン」と言えば、“ウサギ”のように、あるオノマトペに対しては、多くの幼児が同じ語を連想した[渡辺]という。幼児は多様なオノマトペに対しての理解が可能なのである。また、成人と比較したときには「2つの傾向が読み取れた。すなわち、年長児と成人の連想が意味的に類似している語（カチカチ、ニョロニョロ、ピョンピョン等）と、年長児と成人の連想が意味的に異なる語（ツルツル・ドロドロ・ベタベタ等）である。……これは、日常においてそのオノマトペがどのような文脈で使用・出現するのかといった経験や、幼児と成人

の語彙量の違いが影響していることが考えられる「近藤他」という結果を出している。

オノマトペ絵本では後者の成人と異なる意味をこどもが考えることはない。なぜなら、絵本に描かれた絵が意味的に違うことをイメージするのを防ぐからである。したがって、絵本で見られるオノマトペは意味的におとなの考えるものをこどもが表現できる。しかし、そこには経験の違いから、動きは変わってくるということが考えられる。そのときに、必要なのは表現を見た者が、こどもの今を理解することである。そのことにより、こどもの表現はさらに豊かになる。

おわりに

オノマトペが動きを引き出すに十分な刺激であったとしても、読み手の工夫がなければ十分にこどもたちには伝わらない。読み手がリズムカルに表情をつけて読むことで、オノマトペの力が大きくなることを忘れてはならない。「言葉の発生が動きを組織づける [藤野]」ということから考えるとオノマトペ絵本は読む者が背景を十分に理解することと、その表現力を発揮することが必要である。オノマトペ絵本はこどもの動きを引き出す刺激として書いた論文であるが、はからずも絵本を読み聞かせる配慮を確認することができた。

引用文献

- 安藤哲也・金柿秀幸・田中尚人, 2005年『絵本であそぼ!』小学館, p. 45.
石黒広昭, 1993年「オノマトペの「発生」」『言語』22: 26-33.
石塚雄康, 1995年『からだことばのイメージ』青雲書房, p. 22.
小川鮎子・下釜綾子・高原和子・瀧信子・矢野咲子, 2013年「幼児の身体表現を引き出す言葉かけ—オノマトペを用いた動きとイメージ—」『佐賀女子短大研究紀要』47, p. 111.
小野正弘, 2007年『日本語オノマトペ辞典』小学館,
近藤綾・渡辺大介・國田祥子・槇尾真佐枝, 2011年「オノマトペ語に対する幼児のイメージ—4, 5, 6歳児の比較—」『日本保育学会第64回大会発表論文集』p. 287.
西郷竹彦責任編集, 1984年a『絵本の指導Ⅱ実践編 年少前期2歳から4歳』p. 30.
西郷竹彦, 1984年b『絵本の指導Ⅰ理論編』p. 62-63.
椎名誠, 2002年『絵本探検隊』クレヨンハウス, p. 225.
柴真理子, 1984年「擬音語・擬態語と動きの関係について」女子体育, 28, 41, p. 43.
遠矢鵬一, 1992年「幼児の記憶における擬態語的音域の二語化効果」『心理学研究』40: 28-36.
中川素子編, 2003年『絵本で広がる楽しい授業』明治図書, p. 30-31.
中島京子, 2005年『ココ・マッカリーナのしみこむしみこむえほん』主婦の友社, p. 29.
藤田笑美子, 1990年「保育園2歳児クラスで観察された話言葉と歌の中間形式」日本保育学会第43回大会研究論文集, p. 148.
藤野良孝, 2013年『脳と身体の動きが一変する秘密の「掛け声」<オノマトペ>で毎日がグンッとうまくいく』青春出版社, p. 17.
古市久子, 1995年「オノマトペ刺激が幼児の身体表現に与える影響について」『京都体育学研究』10.
古市久子・遠藤晶・松山由美子・吉田清治, 1995年「アンケート調査のデータ読み取り作業における信頼度と問題点についての研究」大阪教育大学紀要第IV部門教育科学, 44, 1, pp. 27-40.
古市久子, 1998年『身体表現』北大路書房.
古市久子, 2004年「乳幼児における表現の発達Ⅱ—2歳児の身体表現—」『日本保育学会第57回大会発表論文集』pp. 508-509.

- 古市久子, 2006年「乳幼児における表現の発達IV－発達と学習の関係一」『日本保育学会第59回大会発表論文集』pp. 284－285.
- 古市久子, 2010年 a 「Imaginationを展開させる身体表現への導入～絵本『はだかの王さま』を使って～」『東邦学誌』39, 2, pp. 49－63.
- 古市久子, 2010年 b 「絵本から聞こえる音楽」『東邦学誌』39, 1, pp. 53－70.
- 正高信男, 2001年『子どもはことばをからだで覚える』中公新書, p. 94.
- 皆島博, 2004年「日英語のオノマトペ」『福井大学教育地域科学部紀要 I (人文科学 外国語・外国文学編)』60, pp. 95－96.
- 三宅興子・浅野法子・鈴木穂波, 2004年『学校図書館発 絵本ガイドブック』翰林書房, pp. 12－13.
- 渡辺大介・近藤綾・國田祥子・槇尾真佐枝, 2011年「オノマトペ語に対する幼児のイメージ－4, 5, 6 歳児の比較－」『日本保育学会第64回大会発表論文集』p. 286.

図の引用

- あずみ虫作絵『びたっ!』福音館, 2013.
- エリック・カール作・くどうなおこ訳『できるかな? あたまからつまさきまで』偕成社, 1997.
- 織田道代文・古川タク絵『ぶぶんぶんぶんしんぶんし』福音館書店, 1998.
- 金関寿夫文・元永定正絵『カニツンツン』福音館書店, 1997.
- 川上隆子『のびのびのーん』アリス館, 1999.
- 越野民雄文・高島純絵『オースッパ』講談社, 2003.
- 五味太郎『言葉図鑑 ようすのことば』偕成社, 1985.
- 五味太郎『るるるる』偕成社, 1989.
- 齋藤洋作・高島純絵『によきによきのき』講談社, 2010.
- 角野栄子文・荒井良二絵『チキチキチキキいそいでいそいで』あかね書房, 1996.
- 谷川俊太郎文・大竹伸朗絵『んぐまーま』クレヨンハウス, 2003.
- 谷川俊太郎文・長新太絵『にゆるペろりん』クレヨンハウス, 2003.
- 谷川俊太郎文・おかざきけんじろう絵『ぼばーぺびぱっぶ』クレヨンハウス, 2004.
- たにがわしゅんたろう作・もとながさだまさ絵『もこもこもこ』文研出版, 2006.
- 長新太『みみずのオッサン』童心社, 2003.
- とよたかずひこ作・絵『ごろごろごろん』すずき出版, 2004.
- とよたかずひこ作『こちょこちょもんちゃん』童心社, 2010.
- 中川ひろたか文・村上康成絵『とんとんどんどん』PHP研究所, 2003.
- まついのりこ作『ぼーるころころぼーん』講談社, 2011.
- 山下洋輔文・本永定正絵・中辻悦子構成『もけらもけら』福音館書店, 1990.
- レオ・ティマース作絵・ひしきあきらか訳『こぶたちちゃんのそりあそび』フレーベル館, 2010.

受理日 平成26年10月1日